現代版　井上円了『哲学堂案内』

三浦節夫
miura setsuo

編者のまえがき

井上円了は明治三十七（一九〇四）年に、現在の四聖堂を建立し、その後、明治四十（一九〇七）年から本格的に建物や庭園を整備して、哲学堂の創立に尽力した。この公園は現在、中野区立哲学堂公園と呼ばれていて、百年以上の歴史を刻み、区民や都民に親しまれている。

現在の哲学堂（野球場やテニスコートを除いた部分）の景況は、大正四（一九一五）年にほぼ出来上がったと言われている。円了は同年十二月十五日に、『哲学堂独案内』を出版し、哲学堂内の哲学に関係する名称を付けた七十七場の歩き方を示している。この本について、現代の哲学者である柴田隆行氏は、「井上円了は生前、『哲学堂案内』という口述筆記の著書を出している……園内の諸施設の由来がここに詳しく説明されているが、漢字や表現を現代風に改めれば、いまでもそのまま使えるほど」であると述べている。

本稿は、この提案を受けて、円了の『哲学堂案内』を現代語訳などに直して、現代の読者に提供しようと試みたものである。そして、つぎのような編集方針をもって、現代版を作成した。

一　原著は、大正四年の『哲学堂独案内』であるが、この本の初版は現在、所蔵されているところがないこと

故井上圓了述
哲學堂案内

がわかった。また、大正六（一九一七）年の再版本も見つかっていない。現在存在している本は、井上円了口述『哲学堂案内』と題した大正九（一九二〇）年の増補改訂三版以降のものである。増補したのは、円了の長男で、財団法人哲学堂の理事の一人であった玄一氏である。今回の現代版の原本は、大正十五（一九二六）年の五版である。現代語訳するにあたり、玄一氏が増補した文章は取り除いた。

二　円了の原文については、文意を損なわない範囲で、漢字や文章を現代語に訳した。

三　原文の漢字には読み仮名がないが、読者の便を考えて、適宜読み仮名をつけた。また漢字の意味が難しいもの、文意が理解しにくいものは、編者が〔　〕の中で説明した。

四　漢文は、原文に続いて、〔　〕の中に、現代語訳を掲載した。

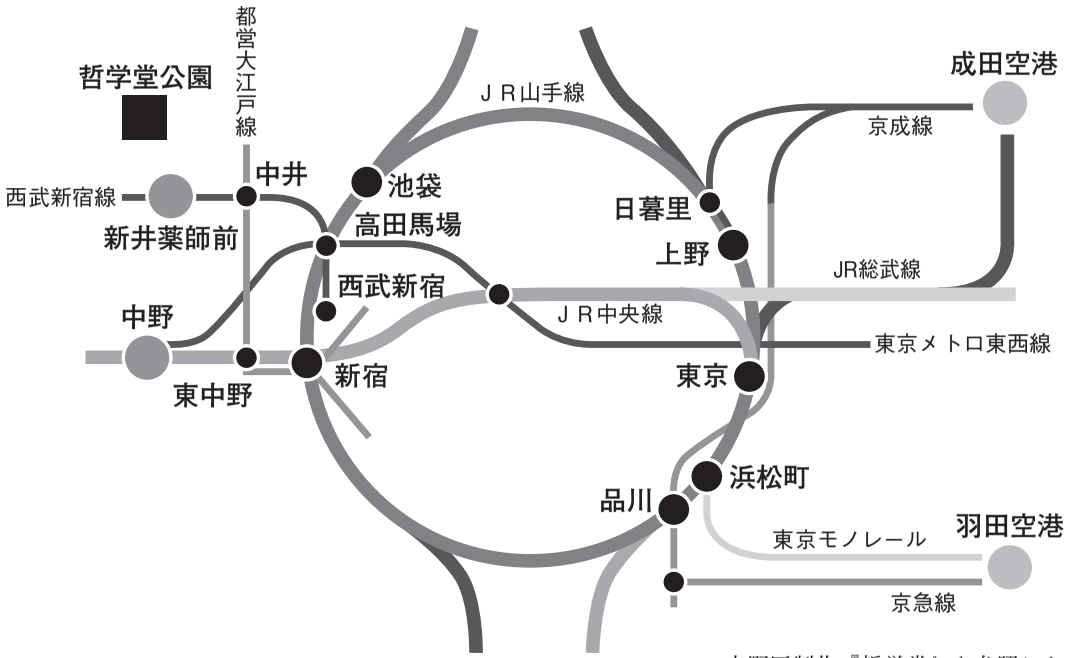
五　冒頭の「道順の案内図と文章」、文中の「哲学堂庭内略図」は、作り替えた。また最後に、原本にはない哲学堂公園略年表を新たに付けた。

本稿を編集するにあたり、文章の現代語訳は『井上円了選集』の編集を担当された大橋秀明氏、漢文の現代語訳は『甫水井上円了漢詩集』の編訳を担当された玉川大学リベラルアーツ学部教授の中村聡氏、その他については現在の哲学堂公園を管理している日本体育施設グループの高橋一平氏・植竹薫氏、以上の方々からご協力を得た。記して感謝申し上げます。

井上円了

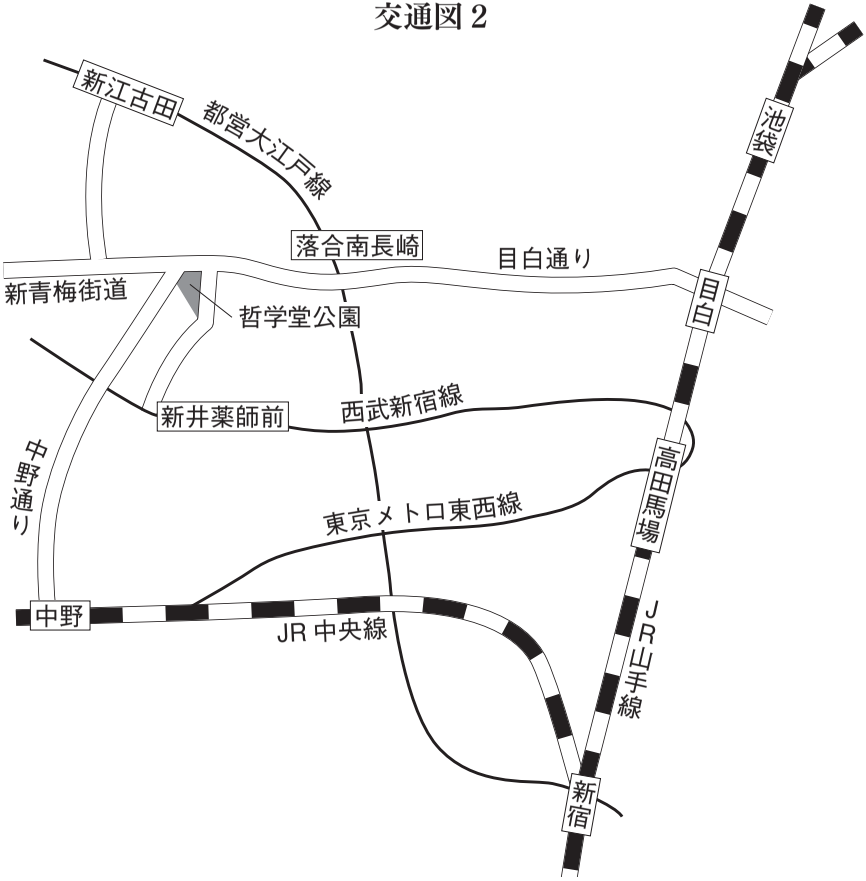
哲学堂案内

哲学堂公園　交通図１



中野区制作『哲学堂』を参照した

交通図 2



哲学堂公園へのアクセス

所在地　〒 165-0024
東京都中野区松が丘 1-34-28
電　話　TEL　03-3951-2515
FAX　03-3951-2280
交　通　○西武新宿線「新井薬師前駅」から徒歩 12 分。
○都営大江戸線「落合南長崎駅」から徒歩 13 分。
○ JR 中央線「中野駅」（北口）からバス。
○ JR 山手線「池袋駅」「目白駅」からバス。

目次

はしがき　156
哲学堂公園（略図）　160
哲学堂庭内七十七場名称　162
一、哲学堂　163
二、哲理門および常識門　164
三、髑髏庵、鬼神窟および天狗松　165
四、四聖堂の内容　166
五、四聖堂の天井　167
六、四聖の選定　169
七、南無絶対無限尊　170
八、六賢台　171
九、唯物園行路　173
十、唯物園内の設備　174
十一、唯心庭行路　175
十二、唯心庭内の設備　176
十三、論理域　178

十四、絶対城すなわち読書堂　179
十五、理想橋、理外門および幽霊梅　181
十六、宇宙館および皇国殿　182
十七、三学亭および陳列所　182
十八、哲学堂の風光　184
哲学堂公園略年譜　188

はしがき

本書の「はしがき」として、哲学堂の由来を述べると、明治三十一（一八九八）年に哲学館〔現・東洋大学〕の敷地内に京北中学校〔現・東洋大学京北中学高等学校〕を併設して以後、両校を別置する急な必要を感じ、将来哲学館を郡部に移すという意見を起こしたのだが、幸いに豊多摩郡野方村大字江古田小字和田山〔現・中野区松が丘〕に売り地があることを聞き、そのうえ、その地は和田義盛（わだよしもり）の遺跡であり、東京都下の名所の一つであることをも知り、早速購入のうえ、これを哲学館将来の敷地と予定し、その標木（ひょうぼく）〔目印とする木〕を立てた。その後、哲学館が文部大臣より大学公称を許可されたので、その記念として明治三十七（一九〇四）年に、三間四面の一小堂をここに建築したのが、今日のいわゆる四聖堂（しせいどう）であり、実に哲学堂の起源である。

その後、自分が神経衰弱症にかかったために、明治三十九（一九〇六）年一月、哲学館大学（今の東洋大学）を退隠するにあたり、種々の都合上、学校移転を見合わせることになり、後継者と相談の結果、これを自分の退隠所とするという名義によって、自らその経営だけを引き受けることを約束した。

いよいよこれを引き受けた以上は、将来永く世道人心〔世の中の道徳と、それを守るべき人の心〕を裨補（ひほ）する〔たすける〕ものにしようとの計画を起こし、ついに精神修養的公園とすることに決め、その建築費および維持費として七万五千円を積み立てる予算をたてた。そして、この金額を集める方法としては、有志者の寄付を仰ぐことは本意ではないから、別に工夫することに取り決めた。

以前、国民道徳の大本である教育勅語の御聖旨（ごせいし）〔天皇のお考え〕を普及徹底させるには、学校教育以外に社会教育・民間教育を各町村に起こさないわけにはいかないとは、自分の年来の持論であり、学校退隠後はもっぱらその方に力を尽くそうと思い、神経衰弱を治す良法は田舎の旅行にあると聞き、療養のかたわら日本全国の各郡各

郷を周遊して、その趣旨を演説することに決めたのだが、開会の経費を支弁〔支払い〕する方法を案出する必要が起こってきた。

この時にあたって、自分は生来悪筆であるという理由で、数十年間全く禁筆していたのだが、近年やむをえずその禁を解き、地方巡遊中、町村有志の所望に応じて、額や掛け物の揮毫〔毛筆で書画を書くこと〕をすることに決めて、これによって受けた謝儀〔謝礼〕の半額は開会経費に充用し、あるいは町村の公共事業・慈善事業に寄付することとし、他の半額は哲学堂の建築費・維持費に充用することとして、明治三十九（一九〇六）年から全国行脚の途に就いた次第である。

以上の方法により集まった金は、これを支出して年々哲学堂の建設を進行し、今日までに六賢台・三学亭・唯物園・唯心庭等を竣工することになった。その詳細は、年々発行の『南船北馬集』の中に報告してある。

このように悪筆をふるって謝儀を拝受しては、世間に対して鉄面皮〔ずうずうしい〕のようだけれども、これはもとから自分の快しとするところではなく、万やむをえず案出した方法に過ぎない。そういうわけで、その金は決して一家のため、子孫のために消費または保存するのではなくて、すべて国家社会に対してその恩に報答する〔こたえる〕ためであることは、広く世間の方々に記憶していただきたいと思う。

自分は、幼少から学校教育を受けた年月は満二十年であり、自ら学校をつくって人を教育した年月もやはり二十年間であった。これはちょうど数理において年月の差し引きができるから、教育から受けた恩債〔恩義と債務〕の返却ができたと言ってよい。

いよいよ学校を退隠するにあたり、自分から従来の財産全部、すなわち十三万五千九百三十五円六十一銭七厘を寄付して、東洋大学財団および京北財団を組織して、明治三十九（一九〇六）年に文部大臣に申請した次第で

ある〔このときから、東洋大学と改称した〕。これ、まさしく自分が教育から受けた恩義に報答したものと思う。しかし、国家社会から受けた恩に対しては、まだ報答していない。

そこで、その報答として哲学堂の公園を完成し、これを国家社会に貢献する考えを起こした。それ故に後日完成の暁には、さらにこれを財団法人とするか、そうでなければその全部を残らず政府に献上する赤心〔まごころ〕である。というわけで、その経営は決して子孫のためにする私情でないことだけは、天下の公衆に告白しておかなければならない。

今から数年後、全国の巡遊が終わったときには、自分の余命がある限りは、自ら哲学堂の門番となり、毎朝灑掃〔掃除〕の余暇に、来観の諸氏に対して座談説法をして、それと同時に学生の監督をしたいと思う。近頃は地方旅行のおかげで、神経衰弱の方は全快したので、東洋大学学長に復帰せよと、内外からの勧告を受けていても、固辞して応じないのは、この将来の望みを持っているからである。

以前、学校を退隠するときに、今後の半生は学校教育に従事しないで、もっぱら社会教育・民間教育に尽瘁する〔力を尽くして苦労する〕ことと公言し、学校に永訣〔ながの別れ〕を告げて去ったことなので、再び学校に戻るときは、死者の復活かまたは幽霊の現出と同様であるからと申して固く断り、引き続いて一方では全国の巡講〔巡回講演の略〕に東奔西走し、他方では哲学堂内の経営を進行するつもりなので、非常に多忙であり、とてもそれと同時に学校の監督経営を兼務する余暇はない。

こうして、自分の学校退隠後の残生はすべて国家社会のために尽くし、世の中から受けた大恩に報謝する決心にほかならない。古人は「児孫のために美田を買わず」〔西郷隆盛の漢詩。「子孫に財産を残すと、子孫は自分で努力せずとも豊かな生活ができるようになり、遊び暮らして結局は身を亡ぼすことになるので、子孫には財産など残さないほ

うが良い」〕と申したが、自分は「私財を残して公衆に分与せよ」との主義を唱えている。その詩は左に掲げておく。

人生如夢而非夢　我食我衣誰所貢　与為児孫買美田　寧遺私産分公衆

〔人生は夢のようであって夢ではない。私が食べている食べ物、私が着ている服は、この社会の中のどこかの誰かが私に恵んでくれたものだ。私は自分の子孫のために財産を残すよりもむしろ社会のために財産を残し、社会の人々に使ってもらいたいと考えている。〕

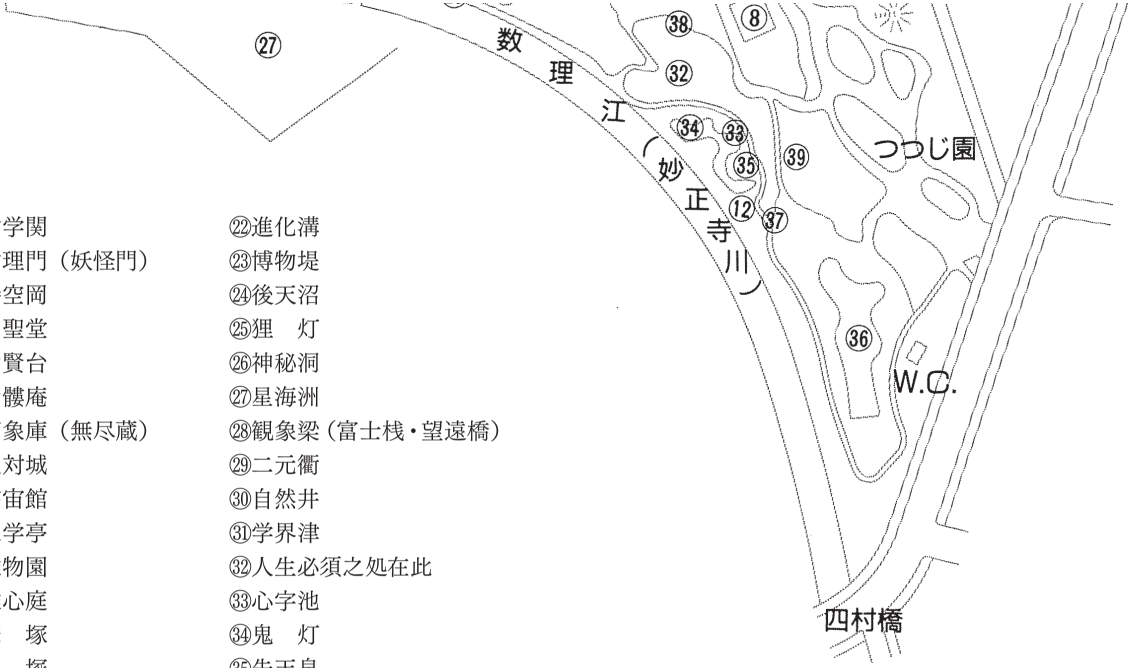
右の主義であるから、自分の一身はできる限り、質素を守り節倹を行い、これによって残したものは、公衆に分与する精神で、哲学堂の方にあてはめる心得である。世間がもしかして自分の本意のあるところを誤解することを恐れて、このように贅言（ぜいげん）〔余計な言葉〕を書いて、本書の巻初に題した次第である。

大正四（一九一五）年十一月

哲学堂主　井上円了記

哲学堂公園（略図）

円了博士
墓地
蓮華寺
新青梅街道
四ツ塚
哲学堂通り
中野通り
下田橋
野球場
テニスコート
W.C.
公園管理
事務所
桜園
イチョウ並木
児童遊園
梅林
1
2
3
4
5
6
7
9
10
11
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
28
29
30
31
40
41
42



①哲学関
②哲理門（妖怪門）
③時空岡
④四聖堂
⑤六賢台
⑥髑髏庵
⑦万象庫（無尽蔵）
⑧絶対城
⑨宇宙館
⑩三学亭
⑪唯物園
⑫唯心庭
⑬筆　塚
⑭硯　塚
⑮懐疑巷
⑯三祖苑
⑰三字壇
⑱万有林
⑲経験坂
⑳感覚巒
㉑物字壇
㉒進化溝
㉓博物堤
㉔後天沼
㉕狸　灯
㉖神秘洞
㉗星海洲
㉘観象梁（富士桟・望遠橋）
㉙二元衢
㉚自然井
㉛学界津
㉜人生必須之処在此
㉝心字池
㉞鬼　灯
㉟先天泉
㊱菖蒲池
㊲認識路
㊳意識駅
㊴演繹観
㊵理想橋
㊶凡天台
㊷皇国殿

哲学堂庭内七十七場名称

哲学関（てつがくかん）
真理界（しんりかい）
鑽仰軒（さんぎょうけん）
哲理門（てつりもん）
一元牆（いちげんしょう）
常識門（じょうしきもん）
髑髏庵（どくろあん）
復活廊（ふっかつろう）
鬼神窟（きしんくつ）
接神室（せっしんしつ）

霊明閣（れいめいかく）
天狗松（てんぐまつ）
時空岡（じくうこう）
百科叢（ひゃっかそう）
四聖堂（しせいどう）
唱念塔（しょうねんとう）
六賢台（ろっけんだい）
筆塚（ふでづか）
懐疑巷（かいぎこう）
経験坂（けいけんざか）

感覚巒（かんかくらん）
万有林（ばんゆうりん）
三祖苑（さんそえん）
三字壇（さんじだん）
三祖碑（さんそひ）
哲史蹊〔哲史塀〕（てつしけい〔てつしべい〕）
唯物園（ゆいぶつえん）
物字壇（ぶつじだん）
客観廬（きゃっかんろ）

進化溝（しんかこう）
理化潭（りかたん）
博物堤（はくぶつてい）
数理江（すうりこう）
観象梁（かんしょうりょう）
望遠橋（ぼうえんきょう）
星界洲（せいかいす）
半月台（はんげつだい）
神秘洞（しんぴどう）
狸灯（りとう）

後天沼（こうてんぬま）
原子橋（げんしきょう）
自然井（しぜんせい）
造化澗（ぞうかかん）
二元衢（にげんく）
学界津（がっかいつ）
独断峡（どくだんきょう）
唯心庭（ゆいしんてい）
心字池（しんじいけ）
倫理淵（りんりえん）

心理崖（しんりがい）
理性島（りせいじま）
鬼灯（きとう）
概念橋（がいねんきょう）
先天泉（せんてんせん）
主観亭（しゅかんてい）
直覚径（ちょっかくけい）
認識路（にんしきろ）
論理域（ろんりいき）
演繹観（えんえきかん）

帰納場（きのうじょう）
意識駅（いしきえき）
絶対城（ぜったいじょう）
聖哲碑（せいてつひ）
観念脚（かんねんきゃく）
観察境（かんさつきょう）
記念碑（きねんひ）
相対渓（そうたいけい）
理想橋（りそうきょう）

理外門（りがいもん）
幽霊梅（ゆうれいばい）
宇宙館（うちゅうかん）
皇国殿（こうこくでん）
三学亭（さんがくてい）
硯塚（すずりづか）
無尽蔵（むじんぞう）
向上楼（こうじょうろう）
万象庫（ばんしょうこ）

一、哲学堂

哲学堂の由来は「はしがき」の中に書いておいたので、その文を一読してほしい。さきに自分が哲学館大学すなわち東洋大学を退隠したときに、一時は哲学堂を退隠所と決めたけれど、その土地は奥深く、その空気は清くて、自然に精神修養に適する地なので、東京都下における青年・学生等の修養的公園にしたいと思って、さらに敷地を拡大し、堂宇を増築し、明治三十九（一九〇六）年以来、一意専心その経営に従事し、形の方はほぼ出来上がった。

これより後は、日曜講演と夏期講習とを開設して、なおそのほかに学生監督所を置いて、市内の各学校に在学する生徒の止宿を許し、朝夕自ら監督の任に当たりたいと思っている。

今日世間の学生を見渡すと、各学校において斐然（ひぜん）として章をなしていても〔まるで美しい錦を織り上げているような才徳がありながら〕、これを裁する〔物事を処理する〕いわれを知らないものが多いありさまなので、自分の今後の残生はひたすらこれを引き受けて、天下の英才を指導してみたいと思う。

こうして本堂を完成し、同時に維持法を確立した上は、もとよりこれを子孫に譲与する念などは毛頭もなく、全く国家に貢献する本意なので、後日永眠に就く場合には、全部をまとめて財団法人にするか、または政府に献納する決心である。今からこのことを唯一の楽しみとして、自分を忘れ、老いのまさにこようとするのを忘れて、休む間もなく働いている次第である。これより、哲学堂庭内の七十七か所の名称について、いちいち説明しながら順路を案内しましょう。

二、哲理門および常識門

本堂の入り口には石柱が二個あって、右の柱には哲学関と刻し、左の柱には真理界と刻し、この境内は哲学上、宇宙の真理を味わい、同時に人生の妙趣を楽しむ所であることを標示しておく。その内側の右の方にある一棟は鑽仰軒〔現・事務所、鑽仰は、聖人・偉人などの徳を仰ぎ尊ぶ〕と名づけて、門戸を監守するために設けたのである。

つぎに、左の方の一門は四聖堂の正門であり、これを哲理門と名づけ、その門柱には「棹論理舟溯物心之源　鞭理想馬登絶対之峰〔論理学を上達させて物の核心（コア）を突き止め、あくまでも理想を追い求めて絶対という世界に登りつめよう〕」と題してある。そして、その両側には仁王尊の代わりに、天狗と幽霊との彫刻物を入れておく。これはあまりにも物好きのようなのだが、この地に以前から天狗松と幽霊梅があったのにつながる意匠〔デザイン〕である（彫刻者は田中良雄氏）。

世間一般が信じるような天狗や幽霊はもとより迷信なのだが、その中には一分の真理を含んでいるところがある。すべて物質界にも精神界にも、その根底には「理外の理」すなわち不可思議を備えている。もし人が、物質界において不可思議の一端に接触したときに思い浮かべるものが天狗になり、精神界において同様の感を浮かべたものが幽霊になったものと思う。

天狗は物的であると同時に陽性であり、幽霊は心的であると同時に陰性である。したがって、一方は男相であり、他方は女相であると決まっている。こういう哲学的意味からさらに標示して「物質精気凝為天狗　心姓妙用発為幽霊〔物質の純粋なエキスが凝り固まって天狗となったのであり、心の本質の不思議なはたらきが人体を飛び出して幽霊となるのだ〕」と掲げておいた。ところが、世間ではこれを妖怪門と申している。この門から一直線に連なっている垣根は、世間の多元的見解と哲学の一元的見解とを区分する境界なので、これを一元牆〔牆は垣根〕と名

づけた。

そして、多元的とは事々物々の差別する方面をいい、一元的とはその深底に潜在する一大原理を指した語と見てよい。その垣根の他端にある門は普通の出入り口なので、これを常識門と題しておく。また、その柱には「四聖堂前月白風清　六賢台上山紫水明〔四聖堂の前に立てば、月は煌々として照り輝き、清らかな風が吹き渡っている。六賢台の上に立つと、山川の景色は清らかでなんと美しいことだ〕」と標してある。この門の右側に来観者の入り口があるから、何人を問わず堂庭内を参観しようとする方々は、この入り口から出入りするように願います。

三、髑髏庵、鬼神窟および天狗松

常識門に隣接する一棟は髑髏庵と名づけ、骸骨を掛けて標示してあるが、決して肉体の死を意味するのではなく、精神上の死を形容したのである。そして精神上の死とは、世間にいて俗塵に汚された心が、ひとたびこの庵に入って消滅するという意味で、塵心俗情〔俗界の情欲にけがれた心〕の死を骸骨に例えたのである。来観者は必ずここで休憩して、帳簿に住所氏名を記入することを願い上げます。そのときには粗茶を進呈することになっているから、遠慮なく番人に命じてほしい。

髑髏庵に連なって小廊下があるが、これを復活廊と名づけたのは、ひとたび死んだ塵心が再び蘇生して〔生き返って〕、新しく哲学的心眼を開くはずの意味を寓した〔例えた〕のである。つまり禅宗で、ひとたび己の心を殺して再び生かすことを教えるのと同様である。これより後は精神界が俗的を離れて霊的に化するから、復活廊に結び建てた二階造りの一棟を鬼神窟と名づけ、その内室を接神室と称し、その楼上を霊明閣と題しておく。従来の休憩所がすでに狭くなったので、特別の珍客をここで歓迎することもできる。

この迎賓室のそばに相連なる松林の中、一株屹立する〔高くそびえ立っている〕長松がある。その名を天狗と言ってきて、遠くから望むときは哲学堂の目標となって、人は「和田山や一本高し天狗松」と呼んでいるほどである。村内の者の伝説には、昔この松を切ろうと試みたことが数回あったのだが、そのつど天狗が邪魔をして果たすことができず、はなはだしいときには、木から血が流れ出たなどと申している。もし、その松を天狗とすれば、他の数百株の小松は木の葉天狗と名づけてよい。

これより、庭内巡覧の順序に基づいて説明することにしよう。

四、四聖堂の内容

髑髏庵の休憩所から出て第一に参観しなければならないのは、根本中堂〔中心になる堂〕ともいわれる四聖堂である。その周囲の平坦を、哲学の時間・空間を表示するものと決めて時空岡と名づけ、その一方の林叢〔林と草むら〕は百科叢と名づけた。ところで、四聖堂は四方正面の建築であり、中央に本尊を安置してあるが、その本尊は宗教的偶像ではなくて哲学的理想である。

さて、哲学の起点となり基礎となり骨目となるものは、物と心とのほかにあるべきはずはない。そこで、まずこの二者を形に示すことにたいそう工夫を凝らし、心すなわち精神は円形・赤色・透明であり、同時に光があるはずのものなので、球灯を中央に掛けることに決めた。その周辺にハートの形をあらわしたのは、そのためである。つぎに、物すなわち物質はその正反対なので、方形〔四角形〕・黒色・不透明であり、しかも心を汚すはずのものなので、方形の香炉を灯下に置くことに決めた。

その周辺に「マッター」および「物」の字を入れたのは、そのためである。我々の本心は清浄無垢〔清らかで

汚れなく、混じりけがない〕であっても、わが感覚が外界の物質に誘い起こされて、いろいろの欲情・妄念を引き起こす点は、透明の球灯が香炉の煙によって曇らされるのに例えて、ひとたび曇った球灯も時々ふいてみがけば、本来の透明を持続することができるように、わが心がひとたび物欲によって汚されようとしても、絶え間なく修養の功を積めば、決してその清浄性を失うことなしということに比較した意匠である。

五、四聖堂の天井

つぎに、物心以上の装置についてはさらに工夫を凝らし、哲学は物心を起点とするが、もしその本源・実体を究めてくれば、必ずこれより以上の実在を考定しないわけにはいかなくなり、その体を名づけて絶対とも無限とも不可知的とも、種々の名称を与えておく。しかし、このような本体は無形・無色であり、とうてい形容することができないものである。

そこで、かりに形相ある方面について物心の本源を考えると、この漠然とした宇宙、この森然とした世界が、太初混沌未分〔天地が開けた初めの時、天地がまだはっきりと分かれていなかった状態〕の時に、物心を胚胎した〔みごもった〕と決めて差し支えない。

ここで、世界開闢〔世界の始まり〕の状態を表示することを思いつき、これを古史と見比べて確かめると、天地がまだ分かれない時は鶏の卵のようであるという説がある。日本および中国では鶏子に例えているが、インドにも大卵化成説〔『外道小乗涅槃論』に、もと日月星辰、虚空および地なく、ただ大水あり、時に大安荼を生ずる。鶏子のように、周囲は金色なり、時が熟して破れて二段となる。一段は上にあって天となり、一段は下にあって地となる。この二つの中間に梵天を生ず。一切衆生の祖公と名づけ、一切有命無命の物を作るとある〕があるから、物心を代表する灯

明と香炉との上に、銀色ガラスの天井を張り、その中央に半球の金色ガラスを挿入した。そうして、その銀色は鶏卵のシロミにあたり、その金色はキミにあたり、前者は宇宙の神髄であり、生元を含むものとし、後者は宇宙の体質であり、養料を有するものとし、その生元が化醇して〔まじり気がなく純粋にする〕心元を開発するに至り、その養料が凝結して物元を形成するに至ったところを表示して、球灯は金球から直下し、角炉は銀色ガラスの周辺から垂下する意匠をあらわすことに決めた。

そしてその周辺の四脚は、いわゆる天の四極〔中国の神話に、四極が廃れ土地が裂けて天が崩れてきたので、鼈（スッポン）の足を切って四極に立てて、五色の石を練って天を補った〕にあたることになる。これ、物心の本体である絶対の有形的方面を形容した意匠である。あるいはまた天・地・人に配当して、天井を天とし、香炉を地とし、球灯を人としてもよいと思う。

つぎに、周囲の天井に丸木のタルキを用いたのは、宇宙の神髄より放射する光線の形容なので、つまり絶対の本体から放たれている真・善・美の光と解釈してよい。すでに心は円形と決め、物は方形と決めたために、本堂そのものも、柱は円く堂は角であるように建築することに決めた。

そうした理想を建築上に現示するについては、武田吾一氏、大沢三之助氏、古宇田実氏を顧問とし、実際の設計は山尾新三郎氏の手に成ることになった。なにぶん貧しいわが身なので、最少の費用で建築する方針をとったために、理想の十分の一も実現することができず、そのためこれを一覧する諸氏は、必ず児戯のようだと一笑するかもしれないが、私の苦心の一端を推察してくれることを望む次第である。

六、四聖の選定

堂宇の設計について説明した上は、四聖（しせい）の由来を述べておきたい。四聖とは、孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四聖人のことである。すでに哲学の本尊は、前述のように物心および宇宙であるとしても、人がよく道を広め、道が人を広めるのではない道理で、その中に潜在する真理を、よく世間に紹介したのは東西古今の哲学者である。そこで、哲学堂内にその人々を奉崇〔尊び、たてまつる〕したいと思って、なにぶん数が多い哲学者なので、代表者を選定しなければならないと思い、自らその選定法を案出した。

つまり、現在では世界の哲学が東洋と西洋とに分かれ、東洋哲学は中国とインドとに分かれ、西洋哲学は古代と近世とに分かれているから、その一つ一つから一人ずつの代表者を選出する新案である。

まず中国哲学では、老子と孔子との二人の大立者（おおだてもの）があるけれども、多くの人の見るところでは、老子よりも孔子を選挙するであろう。

またインド哲学では、多教の意見に照合しても、釈迦を特に選ぶべきである。

つぎに西洋の古代哲学では、プラトンやアリストテレスのような大家がいるけれども、その学の開山となり、その人の師父にあたるのはソクラテス（瑣克剌底）である。だから、ソクラテスを選ばなければならない。

また近世哲学では、群雄が四方に割拠するありさまなのだが、今から百余年前に、欧州の哲学界を統一したドイツのカント（韓図）を除いてほかに、当選すべき人はなかろうと思う。

これらの四大哲学者は、実に学徳ともに備わり、哲学界における聖人であるから、これを四聖と称して、堂内に奉崇することに決めた。もし表をもって示せば、左のとおりである。

哲学
- 東洋哲学
  - 中国哲学――孔聖〔孔子〕
  - インド哲学――釈聖〔釈迦〕
- 西洋哲学
  - 古代哲学――瑣聖〔ソクラテス〕
  - 近世哲学――韓聖〔カント〕

こうした理由で、堂内の宇宙天体を表出する装置の四面に、この四聖の扁額を高く掛けるに至った次第である。

七、南無絶対無限尊

従来哲学堂の四聖堂内には、宇宙と物心とを対向させた意匠を物象にあらわした物だけを用いていたのだが、これは理想的本尊に過ぎない。つまり、向上的本尊というはずのものである。これに対して実際的本尊すなわち向下的本尊を設ける必要を感じ、四聖堂内に「南無絶対無限尊」と刻した石柱（唱念塔）を併置することにした。その説明は左のとおりである。

自分が思うには、哲学の極意は、理論上は宇宙真源の実在を究明し、実際上はその本体にわが心を通じ合わせて、人生に楽天の一道を開かせるにほかならない。ここに、その体を名づけて絶対無限尊という。空間を究めて果てのないのを絶対とし、時間を尽くして限りのないのを無限とし、高く時空を超越してしかも威徳広大無量であるのを尊とする。これにわが心を通じ合わせる捷径〔近道〕は、ただ一心に「南無絶対無限尊」と反復唱念することにある。

人ひとたびこれを唱念するときは、たちまち憂鬱はなくなり、苦悩は減り、不平は去り、病患は減り、多くの悪い波は自然に静まり、無数のいつわりの雲は自然に収まり、すぐに心の中には楽乾坤〔楽天地〕を開き、精神に

は喜びをあらわし、胸中には真・善・美の美しい光を感得するに至る。これと同時に、宇宙の真源から煥発〔火が燃えるように、外に輝き現れること〕する偉大な霊気が、わが心の底に勃然として〔急に勢いよく〕湧き出るに至る。その功徳は実に不可思議である。そして、これを唱念する方法に三つの手段がある。

誦唱＝声を出して「南無絶対無限尊」を唱える。

黙唱＝口をふさいで「南無絶対無限尊」を唱える。

黙念＝目を閉じて「南無絶対無限尊」を念じる。

この唱念法によって、わが心の中に安楽城を築き、進んで国家社会のために献身的に奮闘活躍することを、哲学堂（自称「道徳山哲学寺」）において唱道する教外別伝〔禅宗で、文字や教説のほかに、体験（禅）によって別に伝えられるもの〕の哲学とする。

八、六賢台

来観者は四聖堂を一覧し終わって、七、八間〔一間は約一・八二メートル〕後方へ戻り、赤く塗ってある三層六角の台上に登るはずの順序である。その台上には六人の大賢を奉崇してあるから、六賢台と命名した。建築物の周囲は六間ある点から見れば、六間台といってもよい。前の四聖は世界的であるのに対して、この六賢は東洋的とし、日本・中国・インドの三国の学界から二人ずつを選抜して、ここに奉崇することに決めた。

つまり、日本では聖徳太子・菅公〔菅原道真〕、中国では荘子・朱子、インドでは竜樹・迦毘羅の六賢である。そして中国では、荘子は道教の代表者、朱子は宋儒〔宋代の儒者〕の代表者であることはいうまでもない。

またインドでは、釈迦の哲学と婆羅門〔教〕の哲学とが互いに対抗して、大いに議論を闘わせたことがある。そ

の当時、仏教の方では竜樹が出てインドの学界を風靡（ふうび）する〔なびき従わせる〕ことになったので、これを中興と称し、また八宗の祖師と崇（あが）められている。つぎに婆羅門〔教〕哲学は数派に分かれて九十五種以上あったということであるが、その中で最も理論の高尚なのは数論哲学〔サーンキャ〕である。釈迦も最初は、その派の仙人について学ばれたと伝えられている。そして、この数論の開山が迦毘羅仙であるから、これを代表者と決めた。

さらに表を挙げて示しておく。

- 東洋
  - 日本
    - 上古　聖徳太子
    - 中古　菅公
  - 中国
    - 周代　荘子
    - 宋代　朱子
  - インド
    - 仏道　竜樹大士
    - 外道　迦毘羅仙

この六賢の肖像を扁額として台上に掛け、その中間に小鐘をつるし、各面の六賢の名称を鋳刻してある。その画工は中沢弘光氏、鋳造者は津田信夫氏、建築者は山尾新三郎氏である。この鐘を打つのについて規則が出来ている。「登り来て鐘を打つならガンガンを、三度つづけて六ガンとせよ」、「ガンガンを六とするのは六賢の、ひとりひとりに告ぐる心得」と承知してほしい。

つぎに、二階の壁間には自分の旅行の記念物中、石器・陶器を陳列し、また明治二十三（一八九〇）年以来収集した、神社仏閣の守り札数百種と、汽車の中の茶飲み茶碗百数十個を陳列しておいた。

さらに外部から屋根を望めば、煉瓦（れんが）の一端に天狗が付いている。これは、天狗松の下に建てたためである。

九、唯物園行路

六賢台を出て天狗松の下の小坂を下って右手にとれば、筆塚があるのを見る。この筆塚は自分が全国巡遊中、国民道徳講演の余暇に、人の求めに応じて悪筆をふるい、これより得た謝儀を積んで、哲学堂を開設するに至った記念碑である。それであるから、「字をかきて恥をかくのも今暫し哲学堂の出来るまで」との歌をよんでおき、また台の前面には、

余欲建設哲学堂使人修養身心　荷筆歴遊諸州応需揮毫　積其謝報充此資大半既成　於是築筆塚以記其由云

〔私は哲学堂を建設し人々に身心を修養してもらおうと願った。そこで、筆を持っていろいろな所に漫遊して、求めに応じて書をしたためてきた。その謝礼金を貯めておいて建設費に充てようとしたのだ。大半がすでに出来上がったので、ここに筆塚を建立してその由来を記しておくことにする。〕

と彫り付けてあるが、その本意は、人の厚志を謝し、あわせて悪筆の謝罪をも含めたつもりである。その前を過ぎ去ると、道が前後に分かれている。この点を懐疑巷〔巷は小道や路地〕と名づけておく。これより先方に進めば唯物園に至り、後方に下がれば唯心庭に達する辻であり、「行こうか唯物、帰ろうか唯心、ここが思案の懐疑巷」というはずの場所である。

さて哲学は昔から、心を本拠とするか、物を根基とするか、必ずこの二つの道の一つをとるようになっている。そしてその極端が、一方は唯心論に走り、他方は唯物論に陥るから、庭内の東西両極端に、唯心・唯物の庭園を設置することになった。

つぎに、唯物論は経験を階段とし、理化・博物などの実験学を考証として立論するものなので、唯物園に達する道を経験坂と名づけ、その他の名称はみな実験学から取ってつけてある。

その坂の途中に、感覚巒〔巒は小さな山〕と名づけた所がある。これは、我々が経験するには、耳や目などの感覚によらなければならないという意味を示したのである。ここから下を望めば、小池が扇の面となり、小橋が扇の柄となっているのを見ることができる。

これよりさらに右の方をとり、松林（これを万有林という）の中に入れば、大理石で造った「三」の字形の腰掛け壇〔三字壇〕に達する。ここに哲学の元祖三人を祭る庭園を別置し、それを三祖苑と命名し、三祖碑を建てた。そしてその祖とは、中国では黄帝、インドでは足目仙人〔アクシャ・パーダ〕、西洋ではタレス氏である。

そのほか、松林の中に哲史蹊〔蹊は小さい路〕を設け、ここに哲学者の年表を掲示してある。

十、唯物園内の設備

三祖苑の三字壇を去り、万有林碑のそばを過ぎて石段を下れば、唯物園に入る。ここにある、大文字で「物」という字を描いた芝壇〔物字壇〕が、まさしくその目標である。ここを一過して、そのそばにある客観廬と名づけた草亭〔草亭〕でひと休みするのがよい。客観とは哲学的術語であり、わが耳や目に触れる物界の方面を客観と呼び、これに対して心の方を主観ということになっている。

この周囲には進化溝・理化潭〔潭は水辺や岸〕・博物堤〔堤は土手〕の名称をつけてあるから、いちいち石標について見てほしい。

そして、この庭園に沿って流れる水は、神田上水の分流であり、学界を一貫する川なので、自分はその名を数理江と命じておく。この江上に、望遠橋と観象梁〔梁は橋〕（形状から富士桟と名づけた）とを架けた。そして対岸を星界洲と呼び、これに半月台を建てた。

進化溝を隔てて石窟がある。その暗黒な点は造化の幽玄神秘を示すつもりであり、これを神秘洞と命名した。ここから流れ出る水が進化溝をつくりあげる点は、進化の根源を究め尽くせば、結局は神秘になってしまう。唯物論の究極もまた同じであるという意味を例えたのである。

つぎに目を移せば、園内に狸の灯籠〔狸灯〕が立っている。これは、人生の真情を写したつもりである。狸はよく人を誑惑する〔人をだまして惑わす〕が、人間も詐偽虚喝〔いつわり・からおどし〕、驕慢阿諛〔高慢・へつらい〕、妄語〔うそ〕などの術に熟達している。しかしながら、このような種々の悪徳の中に、時々は光り輝く霊性を発揮することを例えて、狸の腹の中に灯籠を仕込んだものである。

つぎに、そのそばにある小池は、後天沼と名づけたけれども、その形は扇の面を見立てたものなので、通称は扇状沼という。だから、ここに架けた橋は原子橋というのが本名なのだが、扇骨橋と名づけている。つまり、万物の原子が造化力により、次第に集合発展して、末広く世界人文を開発する点を、扇の面をもって暗示したのである。そして、後天の名称は哲学の用語であり、人が生まれた後に、経験を積み教育を重ねて発展する意味である。

つぎに扇骨橋を渡った所に噴泉がある。これを自然井〔井は井戸〕と名づけたのだが、その名のように地底から自然に噴出する天然泉であって、極めて清冷なので、試しに一口飲んでみてもらいたい。これ、天地自然から世界の原動力が、絶え間なく発揚する〔さかんに高まる〕ことに例えたつもりである。

十一、唯心庭行路

自然井から数理江に沿って、唯心庭の方に一歩を進めれば、造化澗〔澗は山あいの川〕と題する石柱が左の方に

立っている。その名は断崖一帯の総称である。そして、巌石の間から混々として小さな流れが湧き出しているのは、やはり造化の妙用〔不思議な作用〕を例えるものと見てよい。

ここからさらに進めば二元衢〔衢は分かれ道〕に達する。二元も哲学の用語であり、物心の二者対立の名称である。つまり、この辻が唯物園と唯心庭との間にあたり、物心二者に関する岐路なので、二元衢と命名したのである。

ここから上の方に向かえば、赤い字で「人生必須之処在此〔人生必須のところ、ここにあり〕」と表示してあるのを見る。これは便所である。もし下の方に向かって水際に下りれば、学界津に達する。そこで、来観の人々の中に、もし便所で大用小用を済ましたときは、この水辺に下りて手を洗うようにするのがよい。つまり、人生の不浄を学界で清めることができる。

ここから唯心庭に至る間は、断崖を開削して〔切り開いて〕道路を通じた所なので、これを独断峡〔峡は細長くせまい所〕と名づけた。独断とは、哲学上で経験に相対する語であって、物質上の学理を根拠とする方を経験派といい、精神上の思想を基礎とする方を独断派というから、経験は唯物に関係し、独断は唯心に関係している。唯物園に至る道に経験坂を設け、唯心庭に達する所に独断峡を置いたのは、そのためである。さらに数歩を移せば、唯心庭に入ることができる。

十二、唯心庭内の設備

唯心庭の主眼〔大切な所〕は心字池であり、中央に「心」の字の形に掘った池がその目標である。そして、川に臨んだ所に倫理淵を置き、山に近い方に心理崖を置き、倫理と心理とは池の両側に置いた。もし心を王と見れば、

倫理と心理とは、左大臣と右大臣の位置にあたる。

また、その中心の小島を理性島と名づけ、理性はわが心の奥底にある本性であることを示したつもりである。そして、その中に鬼灯が立っているのは、人心の実情を例えた意匠である。もし、さきの狸灯を人生観とすれば、この鬼灯は人心観にあたる。つまり、我々の心中に悪念妄情が宿っているのは心の鬼にして、その内部に良心の光明が存するのは灯明のようなものであろう。そこで、心の鬼が良心に押さえつけられるところを形にあらわし、鬼が灯籠をいただきつつ、しかもその灯籠に押さえつけられ、苦しそうにしている状態を示したつもりである。すべて世間の人々は、このとおりの良心の重量が、鬼を押さえつけるようにしてもらいたい。

そのかたわらに架けた橋を概念橋というが、概念は心の一種の作用であり、外界に関連する方なので、理性に達する前置きの作用に過ぎない。

つぎに、その左の方で噴き出している天然泉を先天泉と名づけてある。これは、我々が時によって心の最も深い所から、なんとなく高妙尊厳の消息に接する感じを起こすことがある。これを倫理学で先天の命令というが、実に教育や経験を超越する最高のものである。これを噴泉にあわせて先天の名を下して、そしてその純良な水が心字池に流れ入る点は、先天の命令が我々の心の中に伝わってくるのに例えたものと見てよい。

そのつぎに、池のほとりの高い所に立っている茅ぶきのあずまやは、主観亭と名づけてあって、心界の休息所の意味である。つまり、唯物園の客観廬に対立する名目である。まず、この小亭〔小さなあずまや〕にひと休みして、心界の風光を観察してもらいたい。

十三、論理域

理学の研究が数学に基づくように、哲学の研究は論理による。そこで、哲学庭園としては、必ず論理の一区域を設けなければならない。そして、論理に関する心の作用を哲学上では認識の作用と名づけ、すべての事物を知覚し思考し推理するのは、すべて認識の作用である。ところが、思考推理を待たず、すばやく覚知する方を直覚という。もし、この二者をあわせるならば、いずれも意識作用となる。

今ここに、その関係を示すために、唯心庭と丘の上との間に、二通りの坂道を設けておく。一方は直接にして近く、他方は迂回して遠い。その直接である方を直覚径〔径は細道〕と名づけ、迂回する方を認識路と名づけ、そして認識路の方面に論理域を設けてある。

まず心字池から右の方の坂道、つまり認識路を登れば、途中に傘の形をした小亭がある。これを演繹観と名づけた。さらに登って丘の上に達すると、三脚鼎立〔三本の脚で立っている〕の休息台がある。これを帰納場と名づけておく。

この演繹と帰納とは論理の二大部門であり、すべての事実を取り集めて立論する方を帰納といい、思想の原則によって推論する方を演繹という。もし通俗の語でいえば、論よりも証拠を先にする方は帰納にして、証拠よりも論を先にする方を演繹というといっても差し支えなかろう。

今、ことさらに演繹観を渓頭〔水辺〕に置き、帰納場を丘の上に置いたのは、演繹は心の内で道理に当てはめて断定する方、帰納は広く目を外界に放って引証する方であるからである。来観者はよろしく演繹観で休んで内省し、帰納場で座って外望するように願います。

十四、絶対城すなわち読書堂

すでに論理域を過ぎて丘の上に進めば、認識路と直覚径の間に意識駅（いしきえき）の腰掛けが二脚あるから、ここでもひと休みして、種々の観想をするがよい。この丘の上は宇宙を表示するつもりで、前に述べたように時空岡（じくうこう）と名づけておく。その時間も空間も宇宙も、結局は絶対となる。

すべて何物でも、これと対立するものがあるときには、これを相対と名づけ、対立するものがなければ、これを絶対と名づけるのが、哲学上の決まりである。例えば、物は心に対し、心は物に対するというようなことは相対であるが、もし物心二者の本源実体を究めて、物にもあらず心にもあらず、何とも名状することができないところに達すれば、これを絶対というよりほかに名づけようがない。

そこで、哲学堂内に絶対の一境を置く必要が起こってくる。つまり、帰納場と四聖堂の間にある建築物は、読書堂であるけれども、そのいうところの絶対を表示して、絶対城（ぜったいじょう）と命名することに決めた。もし宇宙そのものを総括すれば、もとより絶対の一つに帰着するはずだが、その中に森羅万象を網羅する道理なので、ちょうど絶対城の中に数万冊の書籍を網羅するのに比べられ、またその万象について深く調べれば、絶対の本体を思い出すことができるように、万巻の書を読み尽くせば、やはり絶対の妙境に到達することができる道理である。

要するに、書籍は哲学界の万象にあたると見た意匠である。その書籍は、自分が明治十九（一八八六）年から約三十年間に、貧嚢（ひんのう）〔貧しい財布〕を傾けて買い集めた国書・漢書・仏書の中、特に明治維新以前の著作であるものが数万冊あるが、これを公衆の閲覧に提供している。堂内の右の方は国書・漢書であり、左の方は仏書である。

そして、そのずっと奥には聖哲碑（せいてつひ）を安置してある。四聖堂の中には肖像を置かない代わりに、ここに肖像を刻して、さらに台石には拙文〔自分のつたない文章〕を添えてある。

凡哲学東西相分　在東洋支那哲学以孔聖為宗　印度哲学以釈聖為首　西洋則古代以瑣聖為宗　近世以韓聖為首　故本堂欲合祀斯四聖而代表古今東西之諸哲　茲刻影像以致鑽仰之誠　如其位次則従年代前後　非有所軒載也

〔そもそも哲学は東西に分けられる。東洋においては中国哲学は孔子を宗とし、インド哲学は釈迦をその始めとする。西洋においては古代はソクラテスを宗とし、近世はカントをその始めとする。このようなことからこの四人の哲学者を合わせて祀り、古今東西のさまざまな哲学者の代表とし、そして四聖の姿を彫刻して彼らの学徳を真心をもって仰ぎ慕おう。四人を偉い順に並べるとちょうど年代順になる。軒先に簡単に掲げるような軽いものではない。〕

この肖像は田中百嶺氏が、故橋本雅邦翁の図に基づいて描いたものである。以上のようなわけで、書函〔本箱〕のある場所は聖哲院と名づけても差し支えない。

つぎに、階上は閲覧室に当てはめてあるから、これを観念脚と名づけたい。そのわけは、書を読んで種々の観念を凝らすという意味である。

さらに、屋上には観望台を置き、書を読んで飽きたときの休息所に当てはめてある。その台は四方を一望するのによいから、これを観察境、一名大観台と名づけておく。つまり、観念脚に座って観念を凝らし、観察境に登って観察を広げるようにする意味にほかならない。

そして、この図書館は大正四（一九一五）年十一月に、御大典記念〔大正天皇の即位礼記念〕として開設したものであることは、永く忘れぬようにしたい。そこで、図書館の前に記念碑を建てた。

十五、理想橋、理外門および幽霊梅

以上の聖哲院、観念脚、観察境を総称して絶対城と名づけたのに対して、これの隣にある無水溝を相対渓と名づけ、その渓に架けた石橋を理想橋といい、橋の外の小門を理外門と名づけることに決めた。

本堂には三か所に関門を設けてあるが、正面の哲理門は世間のいわゆる表門にあたり、常識門は通用門にあたり、この理外門は裏門にあたる。そして、これを理外と名づけたのは、宇宙間には哲学上の論究を尽くした上は、必ず「理外の理」が存在するのを知るからである。なおまた、その門の上扉を解いて外に開き、下扉を上げて内に支えるようにすれば、ただちに屋根を形作るようになる。これ、実に理外の理外たる理由である。

つぎに、理想橋の左の方に痩せた梅の木がある。これを幽霊梅と名づけたのは、最初自分が駒込の住宅にいたとき、ある夜、その木の下に幽霊が出ていると言って騒いだことがあった。ところが、よくよく調べてみると、室内のランプの光線が漏れて、それが枝に映っていたことがわかり、「幽霊の正体見ればランプなり」と言って笑ったことがあった。

その後、この梅を幽霊梅と名づけたが、哲学堂に天狗松があるから、これと夫婦にするようにと思い、ここに移したのである。その後自分が、ある暗夜十二時頃に、戸を開いて庭内の様子を見ていると、この梅の木の下に蕭々とした〔ものさびしい〕陰火〔ゆうれい火〕が燃えたり消えたりするのが見えたので、これは世間でいう幽霊火だろうと思い、その火の方に近づいて行って見れば、昼間に掃除人が地に穴を掘り、その中で枯れ葉を集めて焼き、その上に土を載せて置いたのだが、夜半までその火が消えないものであった。このように、二度までも幽霊を現出したことがある。

つまり、哲理門の両側に天狗と幽霊とを入れたのは、この梅と、かの松とによって、呼び起こした意匠である。

十六、宇宙館および皇国殿

幽霊梅の隣にある一棟は宇宙館である。そして、その中に特別に置いた一室は皇国殿である。哲学は宇宙の真理を研究する学なので、宇宙館を建てる必要を感じ、時々哲学の講話をしたり、または講習を開くために設けた講義室である。これと同時に、哲学は社会・国家の原理をも講究する学なので、世界万国中の最も美しい皇国殿を設ける必要を認め、ことさらに宇宙館内に一室を設け、その壇上に〔教育〕勅語を掲げることに決めた。つまり、前の柱の上に「宇宙万類中人類為最尊　世界万邦中皇国為最芙〔宇宙万類の生物の中で一番尊いのは人類であり、世界の国々の中で一番美しいのは皇国（日本）である〕」という二つの聯〔聯は律詩の一対の句〕を掛けたのは、このわけを示すためである。そこで、皇国殿は勅語奉崇室と名づけてよい。

その建築は四角の居室の中に、さらに横斜する一室を入れたものであり、世界無類の構造だろうと思う。これは私の考案であり、山尾氏の設計である。また、その棟の上に烏帽子を載せたのは、皇国殿があることを表示するためであるが、これも他に比類ないものであろう。

この宇宙館のそばに三角形の一つの小さな丘があり、その頂に三角形の一つの小さなあずまやがあるが、これは三学亭というものである。

十七、三学亭および陳列所

四聖堂は世界的であり、六賢台は東洋的であるから、今一つ日本的なものを設ける必要が起こってきた。そこで、さらに三学亭を建てることを工夫した。そして、三学は三角と音が相通じるので、すべて三角づくしの意匠を用いた。まず、三学の意味は何かというと、わが国には古来、神・儒・仏の三道がならんで行われ、その三道

ともに碩学〔学問の深い人〕大家を輩出している。もし、その大家の中の代表者を三道の中に求めるについては、十人十色の意見が起こるに相違ない。

ところが、私は碩学という点に重きを置き、三道の中でも最も著述の多い人物を選抜することに決め、著書目録を調べると、神道では平田篤胤、儒道では林信勝（羅山）、仏道では釈凝然であることを見つけ出し、これを奉崇することに決めた。三学亭の天井に掛けた石額の彫刻は、やはり田中良雄氏の作である。

ここから三角形の丘を下りた所の左の方に「尾無毛泉不白〔「尾」という字に毛が無ければ「尸」となり、「泉」に白が無かったら「水」になる。「尸」と「水」が合わされば「尿」となる〕」の石柱があるが、その句は尿所〔便所〕を示す判じものである。つまり、「尾」の字から「毛」を取り、「泉」から「白」を除いて、二つの字を合体させれば「尿」の字となる。その奥に硯塚を設け、筆塚に対立させた。

つぎに、哲理門の裏面に掛けた二つの聯は、哲学の意味を詠んだ拙句であり、「一心大海起智情意之波　絶対古月放真善美之光〔心を一つにするかのような大海は智・情・意の波を起こし、古くから変わらぬ月は真・善・美の光を放っている〕」の〔原文で〕二十字である。もし、その意味を理解しない人があれば、哲学に入って味わうように願いたい。

ここから数歩を進めれば、一つの倉庫が孤立しているを見る。この一棟は陳列所（無尽蔵）であり、階上を向上楼、階下を万象庫と名づけた。ここには内外周遊〔国内や海外の旅行〕の記念物を陳列することに決め、その中に陶器・石器（六賢台の階上にあり）を除くほか、種々雑多のものを玉石同架式に配列してある。また、妖怪棚、珍奇棚もある。とりわけ貴重なのは、文殊菩薩の木翁〔木彫りの翁像〕（勝海舟翁寄贈）〔現在、東洋大学に所蔵〕、不動明王の画像、閻魔大王の彫刻物〔現在、中野区立歴史民俗資料館に所蔵〕である。これは、哲学堂の国

宝的宝物と言っている。

十八、哲学堂の風光

陳列所を出て再び髑髏庵に帰れば、堂内の庭裏を一巡し終わったことになる。そのほか、庭外の風景については八景を設けてある〔近江八景になぞらえたもの〕。

富士暮雪――哲学堂の西側妙正寺川を隔てた向こう側は旧片山村で雑木が茂り、疎林〔疎林は落葉して奥まで見すかせる林〕の上に富士山が眺められた。

御霊帰鴉――御霊（みたま）神社は道路を隔てて園地の東側にあり、昭和十二、三年頃までは老杉がそびえ、ねぐらを求める鴉が集まった。

玉橋秋月――妙正寺川は玉川の分水と考えていた円了博士はこれを玉渓と称していた。したがってその川に架かる四村橋（園の東南端）を「玉橋」とよんだのであり、ここでの名月は美しかった。

氷川夕照――夕陽は氷川神社（江古田の総鎮守、今の江古田二丁目）の杜にしずみ、

薬師晩鐘――名高い新井薬師梅照院（新井五丁目）の夕暮の鐘がきこえる。

古田落雁――「古田」は江古田の田圃（たんぼ）の略で、旧江古田村の田圃には秋になると雁がわたり、

鼓岡晴風――旧片山村の丘陵を鼓ヶ丘とよんだが、その晴風は颯々（さっさっ）〔颯々は風がさっと吹く〕として快く、

魔松夜雨――そして園内にあった「魔松」（天狗松）には静かに夜の雨がそそぐ。

右の説明はあまりに煩わしいので略しておく。ただし、庭内の風致については、私の所吟が数十首ある。ここに拙劣ながら五、六首を掲げて、跋文〔あとがき〕に代えることにしましょう。

清風一過万松鳴　自作唯心唯物声　聴到門前有知己　幽霊天狗笑相迎

〔清らかな風が一陣吹きすぎて辺り一面の松が葉擦れの音を立てると、その音が自然と唯心唯物の音となって聞こえてくる、その音を聞きながら門の前までやって来るとそこには知人がいたではないか、幽霊や天狗が笑いながら私を出迎えてくれることだ。〕

哲学堂成已十秋　友賢師聖復何求　一箪蔬食吾生足　身不自由心自由

〔哲学堂が完成してもう十年経った、人徳ある人を友とし聖人を師と仰いで更に何を求めようというのだ。飯櫃（めしびつ）に入った米の飯と粗末な副菜があれば私は十分に生きていける、体は不自由だが心はなんと自由なことだ。〕

哲学堂前過者誰　出門相見是吾師　嚢無一物難賒酒　笑使幽霊陳謝辞

〔哲学堂の前を通り過ぎるのは誰だろう、門を出て見てみると、なんと吾が師ではないか。財布の中が空っぽで先生に酒をご馳走することもできないので、愛想笑いをしながら幽霊に陳謝の挨拶を述べさせた。〕

野方村尽処　丘上設仙荘　天狗松陰路　幽霊梅畔堂　汲泉朝煮茗　掃席晩焚香　入夜裁詩句　閑中自有忙

〔野方村が尽きる所、丘の上に俗世から離れた別荘を建てた。天狗を松陰路（しょういんろ）に潜ませ、幽霊を梅畦堂（ばいけいどう）に住まわせた。朝は泉を汲んで茶をたて、部屋を掃除して晩には香を焚（た）くという優雅な生活だ。しかし夜になると詩作にふけるので、閑（ひま）そうに見えてなかなか忙しいのだ。〕

無客門常鎖　菜畦路稍通　洗心玉渓水　養気鼓岡風　醉処吾忘我　吟辺色即空　俗塵渾不到　静坐守仙宮

〔客も無いのでいつも門を閉ざし、菜園の畦（あぜ）道は〔人が通ることもないので〕ようやく通れるほどに狭くなっている。玉渓の水が心を洗ってくれ、鼓ヶ丘の風が気を養ってくれる。酒に酔っては忘我の心地となり、詩を吟ずれば色即空（この世の物質的なものは、そのまま空である）という心地になる。俗世間の煩わしい事柄はここには全く押し

寄せることもなく、静かに座ってこの別世界の住まいに居続けるのだ。〕

聖堂深処座　兀々似禅僧　守黙疲凭几　読書倦曲肱　屈伸身自在　迷悟意全能　終日無塵累　我居是武陵

〔聖堂の奥まった場所に座り、一心不乱になって読書し、あたかも禅僧のようだ。沈黙を守って机に凭れかかって書に挑み、読書に倦きたら肘を曲げてみる。疲れた体を屈伸させてみると、体は自在に動かすことができ、頭も迷ったり悟ったりと全能の働きをしている。一日中俗世間の煩わしさも無く、私の住処は武蔵野の丘陵にある。〕

髑髏庵独座　詩書作良媒　雖設門常鎖　不招客自来　雨声涵瘦竹　月影宿疎梅　醉後漫敲句　呼童掃硯埃

〔髑髏庵に一人で座っていると、詩や書が良い仲間となってくれる。門は設けてあるが常に閉ざしたままで、それでも呼んでもいない客〔雨や月〕が自然とやって来る。雨が痩せた竹を打つ音が聞こえ、月がまばらな梅の枝にかかっている。酒に酔った後に自作の詩の句を推敲し、書き直そうと決心して、僕を呼んで硯の埃を掃除させた。〕

天国繞吾屋　六塵悉福音　聞雷知夏到　見雪覚冬深　秋月浮禅味　春花映道心　四時佳興足　朝夕枕肱吟

〔天国は我が家を囲み、六塵〔六塵は六根つまり目・耳・鼻・舌・身・意に触れて心を動かすもの〕はすべて私に福音を伝えてくれる。雷を聞いては夏が来たことを知り、降る雪を見ては冬の深まりを知る。秋の月は禅〔俗気のない〕趣があり、春の花々の色彩は慈悲の心を映しだしている。四季の風流な興趣に満足し、朝に夕に肘を枕にして詩を吟じている。〕

哲学堂深世事疎　清閑最好閲仙書　風青天狗松陰路　月白幽霊梅畔廬　欲究六塵悉文字　静観万法即其如

更鞭理想遊方外　裾物繙心読大虚

〔哲学堂の奥深くに生活して世事には疎くなり、静まり返った環境の中で俗世間からかけ離れた書物を最も好んで読んでいる。青々とした風が吹き渡って天狗は松陰路に潜み、幽霊は梅畦の蘆に引っ込んでいる。哲学を究めよう

とすると六塵がすべて文字になってはっきりと表れ、静かに眺めていればすべての法則が自然と向こうからやって来て分かるようになる。夜更けになったら理想という馬に跨(またが)ってこの世の外に飛び出して遊び、物〔形而下〕に従ってその心〔形而上〕を解釈してみたがただ虚しいだけであった〔枯淡虚勢の域に達したという意味であろう〕〕。

哲学堂公園略年譜

年	西暦	月　日	事　　項
安政５	1858	３月18日	創立者・井上円了、越後国三島郡浦村（現新潟県長岡市浦）、真宗大谷派慈光寺の長男として誕生
明治４	1871	４月２日	東本願寺にて得度
明治11	1878	９月	東本願寺留学生となり、東京大学予備門に入学
明治14	1881	９月	東京大学文学部哲学科に入学
明治17	1884	１月26日	哲学会（現日本哲学会）を創立
明治18	1885	７月10日	東京大学文学部哲学科を卒業
		10月27日	第１回哲学祭（現哲学堂祭の起源）を挙行
明治20	1887	９月16日	哲学館（現東洋大学）を創立。東京・湯島の麟祥院で開館式を挙行
明治21	1888	６月８日	第１回欧米視察に出発。翌年６月に帰国
明治22	1889	11月13日	本郷区駒込蓬莱町に新校舎を建設して移転式を挙行
明治23	1890	11月２日	第１回全国巡回講演に出発。哲学館専門科設立の基金募集を行う。明治26年まで継続
明治29	1896	12月13日	哲学館、類焼により全焼
明治30	1897	７月17日	哲学館、原町（現文京区白山）に移転
		８月25日	宮内省より恩賜金300円を受ける
明治32	1899	２月26日	恩賜金を基礎に、京北中学校を開校。式典を挙行
明治34	1901		東京府豊多摩郡野方村大字江古田字東和田、通称和田山の土地の購入交渉を行う
明治35	1902	１月	和田山の土地の売買契約を結び、第１回の支払いを行う
		11月15日	第２回欧米・印度の海外視察に出発。翌年７月27日に帰国
		12月13日	文部省、哲学館の中等教員無試験検定の特典を剥奪。いわゆる哲学館事件が発生
明治36	1903	10月１日	哲学館が専門学校令により「私立哲学館大学」として認可される
			同日付けで、「哲学館紀念堂設計図」（現四聖堂）が『東洋哲学』に発表される
明治37	1904	４月１日	哲学堂（現四聖堂）の開堂式を挙行。和田山の土地を哲学館大学の移転予定地とする

年	西暦	月　日	事　　項
明治39	1906	１月	井上円了、哲学館大学長、京北中学校長の辞職を発表し、財団法人へ寄付行為を行う。そして、哲学堂に退隠する。哲学館大学の移転は中止となり、哲学堂の土地は井上円了が東洋大学から買い戻すことになる
		４月２日	井上円了、修身教会運動と哲学堂の建設のために、第３回の全国巡講を開始
		６月29日	哲学館大学を「東洋大学」と改称し、７月４日に私立東洋大学財団を設立
明治40	1907	12月11日	井上円了、「哲学堂拡張予告」を発表
明治41	1908		六賢台と三学亭の外部建築が竣工
明治42	1909	11月	哲学堂の哲理門、六賢台、三学亭が落成
明治43	1910	１月28日	井上円了、野方村江古田の蓮華寺前住職・加藤海誓氏と、墓地の件を約定する
			今後の計画として、庭園、四聖の銅像、図書館のために、概算で５万円が必要と計画する
明治44	1911	４月１日	第３回の南半球と欧米の海外視察に出発
明治45	1912	１月22日	海外視察から帰国
			７月31日以前に、哲学堂庭園に命名する。総名、各名にわかれ、哲学堂公園の骨格ができる
大正１	1912		７月31日以降に、哲学堂の物字園が完成。講堂および図書館の建設を計画
		８月	修身教会を「国民道徳普及会」と改称
大正２	1913	６月	井上円了、『哲界一瞥』を出版。小講堂（宇宙館、皇国殿）を建築。石門を新設
		12月３日	哲学堂の宇宙館が落成
大正３	1914		図書館の新築、大半が竣工。洪水のために、唯物園が破壊され復旧工事。論理関に傘亭を新設し、その周辺に小庭を築造
大正４	1915	10月23日	哲学堂の図書館の落成披露会を開催（24日まで）。以後、哲学堂が公開される
		12月15日	井上円了、『哲学堂独案内』を刊行
			図書館の完成。図書館に四聖の石像、筆塚を新設。霊明閣を創建、陳列所を開設、帰納場と三祖壇を築造
大正５	1916	５月14日	哲学堂において日曜講演を開催
		６月４日	哲学堂図書館の日曜公開はじまる

年	西暦	月　日	事　　項
大正５	1916	７月16日	哲学堂において夏期講習会を開催。井上円了、「活仏教」を講演（23日まで）
		７月20日	井上円了、『哲学堂図書館図書目録』を刊行
			川向うに星界洲を開設し、望遠轎と観象梁を架す
大正６	1917	７月10日	井上円了、「哲学の教外別伝」を『東洋哲学』に発表
			星界洲に半月台を建築。図書館前に紀念碑を設置
大正７	1918	１月22日	最後の遺言状を起草
			硯塚、史垣を設置。四聖堂内に唱念塔を置く
大正８	1919	２月10日	井上円了、「哲学上に於ける余の使命」を『東洋哲学』に発表
		５月５日	井上円了、中国巡講に出発
		６月５日	井上円了、中国・大連にて講演中に倒れる
		６月６日	井上円了、午前２時40分、中国・大連にて逝去する。61歳
		６月22日	東洋大学学葬が挙行され、和田山の蓮華寺に埋葬される。法名甫水院釈円了
大正８	1919	６月25日	東京区裁判所により井上円了の遺言の検認を受ける
		11月23日	第１回四聖祭を挙行
		12月９日	井上円了の遺言による財団法人哲学堂が認可される
大正９	1920	11月７日	法会・四聖祭（現在の学祖祭、哲学堂祭）挙行
大正10	1921		庭球場を新設
大正15	1926	６月６日	井上玄一、「哲学堂拡張私案」を発表
昭和５	1930	６月	井上円了の妻・敬から財団法人哲学堂へ日本銀行などの株券が寄付される
昭和６	1931	春	野球場を新設。庭球場も六面に拡張
			星界洲に接した鏡花園と梅林が完成
昭和７	1932	12月	報知新聞社主催の「新東京名勝　選外十六景」のうち、第11位となり、記念碑が建立される
昭和８	1933	１月24日	都市計画法により、哲学堂を中心とする周辺が「野方風致地区」に指定される
			天狗松が枯死、伐採する
昭和13	1938	７月10日	妙正寺川が氾濫し、哲学堂の石段の中段まで浸水。不二橋が流出。その後、護岸工事などの復旧工事
昭和15	1940	３月23日	四聖堂に釈迦涅槃像を安置し、入仏式を挙行

年	西暦	月　日	事　　項
昭和15	1940	11月17日	宇宙館内の皇国殿に聖徳太子尊像を安置し、除幕式を挙行
昭和16	1941	７月	出水により唯物園に甚大な被害。望遠橋が流出。川岸も大被害を受ける
		10月15日	財団法人哲学堂事務所より『哲学堂』を刊行。井上玄一、「哲学堂外苑計画」を発表
			この年？、幽霊梅が枯死、伐採する
昭和17	1942	１月31日	東京緑地計画により都市計画野方緑地となる
		年末	陸軍から哲学堂に対して、「グランドを貯木場に」「松林に高射砲陣地を」などの要請あり
昭和18	1943		防空地帯に指定される
		３月31日	財団法人哲学堂理事・井上玄一等、創立者の遺言に従って、東京都へ哲学堂の寄付を申し出る
昭和19	1944	３月25日	都議会の議決を経て、哲学堂は正式に東京都へ寄付される
昭和21	1946	10月26日	「東京都立哲学堂公園」が、都立公園で戦後の２番目に開園される
			開園に先立ち、東洋大学財団・財団法人哲学堂から哲学堂宣揚会設立の申し出あり
昭和22	1947	早春	哲学堂にも農地改革問題が発生。畑地として貸していた運動場を、強硬手段でもとの野球場に復活させる
		８月19日	哲学堂宣揚会が実質的に設立される
		10月25日	東京都、８月15日に東洋大学名義の土地（約5000坪）に対して地上権を設定。その運動施設部分を追加開園
昭和43	1968	４月15日	「哲学堂公園のプール設置に関する請願」提出。不採択となる
		10月20日	井上玄一、哲学堂宣揚会から『哲学堂案内』を刊行
昭和47	1972	12月19日	井上玄一、85歳で逝去する
昭和49	1974	11月20日	東洋大学、東京都と土地の売買契約を結ぶ
昭和50	1975	２月１日	東京都、東洋大学より約5800平方メートルの土地を買収
		４月１日	東京都から中野区へ移管され、「中野区立哲学堂公園」となる
		７月10日	哲学堂の図書が、東洋大学へ無償譲与される

年	西暦	月　日	事　　項
昭和53	1978		公園管理事務所・運動施設事務所を建築
昭和57	1982		中野区教育委員会により哲理門、四聖堂などの古建築物６棟の調査開始
昭和59	1984		古建築物６棟を区有形文化財として指定・登録
昭和60	1985		古建築物６棟の調査報告ならびに修復工事実施
昭和62	1987		哲学堂公園ルネッサンス構想が策定される
昭和63	1988	３月31日	中野区教育委員会から『哲学堂公園内古建築物調査報告書』『哲学堂公園内石造物及び聯・扁額類調査報告書』刊行
		７月１日	財団法人中野区文化・スポーツ公社が設立され、哲学堂公園の施設が受託事業となり、哲学堂公園運営協議会が設置される〔後に変更される〕。
			常識門、髑髏庵などの古建築物６棟および公園を区有形文化財として指定・登録
平成１	1989	10月	中野区歴史民俗資料館開館。哲学堂公園所蔵の陳列物が移管される
平成３	1991		古建築物修復工事（３棟）。便所、売店建築工事
平成４	1992		「四阿」他の整備工事。古建築物修復工事（３棟）
平成５	1993	４月10日	哲学堂ルネッサンス整備事業の完成を記念して、古建築物の公開、講演会が開催される（18日まで）
平成７	1995	２月20日	哲学堂弓道場が開設される
平成11	1999	６月６日	井上円了没後80周年記念として、東洋大学から石碑が寄贈される
平成12	2000	３月	梅園が再開される
平成21	2009	３月16日	東京都名勝公園に指定される
		12月４日	「哲学の庭」が開設される